

よき友を語る ⑥ 「小杉未醒」

山を知ること天下第二位

郷里の裏道を通る未醒画伯

仙人のやうだと語る俳人町長 (比舟 清水秀)



写真は小杉未醒画伯と清水町長の自画像

清水 比庵(しみず ひあん、一八八三年(明治十六年)―一九七五年(昭和五十年) 俳人、歌人、書家、画家、政治家。本名 秀^{ひで}。号は他に七舟、比舟、比安。晩年は「今良寛」と呼ばれた。岡山

県上房郡高梁町に生まれる。京都帝国大学(現・京都大学)卒業。司法官として神戸地方裁判所に勤務。退官して安田銀行に入行。その後古河電気工業会社に勤務。日光精錬所に勤める。歌集『夕暮』を「清水七舟」の筆名で刊行。歌誌『二荒』を創刊。一九三〇年要請を受けて栃木県上都賀郡日光町(現・日光市)の町長となり、日光の観光行政の基礎を作る。一九三五年に、萩原朔太郎、岡本かの子、中河与一等を中禅寺湖畔に招き「慈悲心鳥を聴く会」を主催し、「歌人町長」と呼ばれる。号を「比庵」に改める。町長辞職後は和歌、書などの創作活動に専念する。戦後の一九五八年に日光市名誉市民となる。一九六八年に地方の歌誌であった『下野短歌』が全国誌に発展し『窓日』と改称、その主宰となる。

日光山内、唯心院の閑寂な離れで、俳人町長として知られる 比舟こと清水秀^{ひで}氏は、朝の清澄な老杉の姿に見惚れつつ、山紫水明の日光が生んだ南画壇の雄将 小杉未醒画伯のことにつき語り続ける。

「小杉さんは酒と山登りが好きな人です。その足跡天下に普^{あまね}く、田村剛博士を除いたら天下の山野を知つてゐる者は、自分より外にないと自慢されてゐます。年に二、三回日光に来られるが、いつも奥日光へ出かけられるやうです。しかも少年時代の友達に邂逅するのが嫌だといつて、大通りを歩かず裏道を通られるやうだが、あの人は仙人見たいな人だから、旧友などにあふと面倒だし種々と取沙汰されるのを好まぬためです。ですから

郷里には友達らしい友達はゐないやうです。

私は小杉さんの漫画が好きでよく集めてゐましたが、元より話しをする機会もありませんでした。たまたま雑誌『二荒』の表面を頼んだところ気持ちよく引受けて下さり、それ以来五年程往来するやうになつた訳です」と画伯との交友関係を語つてから、小杉さんの人物観を一くさり。

「日光の人は（小杉さんが）少しも郷里の事をかへりみぬと愚痴をこぼすが、それは画を描いてもらはうとか、金をださせやうとかいふ考へが先に立つから小杉さんが心よく迎へないので、話しを尽せばいくらでも描いてくれる人です。いつか早乙女一といふ片腕のない人が、国防献金するとて県出身の画伯に描いてもらったことがあるが、献金の資にする画の外に立派な画を描いてもらったといつて、非常に喜んでゐたことがあつた。

つい先だつてのことだが、水戸で画会を開き四百本も売れたが、売上金は門人等に飲ませたりなんかでスツかり資つてしまつたさうです。いつか出版した放庵歌集の故郷清秋といふところに、

父がゐし六畳座敷 明らさまに秋の陽てれば 父恋しけれ

の歌があるが、今は亡き父母に対する心情が偲ばれて嬉しい。」と話しは尽きない。

清水氏は写真は嫌ひで撮つたことがないといつて、自画像を描いてくれた。